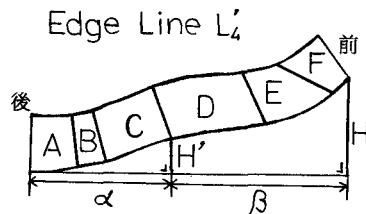


頸部の動作に伴う頸部体表面の変化に対応するスタンドカラー構成条件

福山市立女短大 ○増田智恵 山本百合子 増田茅子

【目的】第3報では、頸部の動作に伴う頸部体表面の部位別の変化を把握して、スタンドカラーを構成するとき必要とするゆとりへの条件を見出そうとする。あわせてゆとりを考えた場合のカラーの衿付線の形状について考察を試みたので報告する。

【方法】被験者は平均年齢19.2才の女子学生10名。実験期間は1981年5月下旬。頸部の動作は、静立位、左・右屈、前・後屈、左・右回旋である。静立位頸部体表面に頸付根線 L_1 とこれに平行に1cm間隔に頸囲線 L_2, L_3, L_4 を描いた。各基準点を通る鉛直線で頸部を前後左右に分け、さらに後部は後正中線から左右各々 $\frac{1}{3}, \frac{1}{2}$ の位置で、前部は前正中線から胸鎖乳突筋、 $\frac{1}{2}$ の位置で分割線を描きA～Fの各部にわけた。各動作時の L_1, L_4 ラインの周径、長径、幅径を計測。各動作時の頸部を石こう採取し、平面展開図を作製。展開図での計測箇所を図に示す。



平面展開図計測箇所

【結果】1. 頸付根線 後部は後屈時に最大増加率 A-10.54～10.87%，B-4.17～13.30%，C-13.07～11.63%を示した。前部は最大増加率 D-3.64～8.04% E-1.36～1.86%，F-17.93%で後部に比べ部位による各動作時の差がみられた。2. 人体頸囲線 L_4 は、動作によりF以外の各部位が増加を示すが、これを平面に展開した Edge Line L'_4 は、さらに大きな増加率を示した。3. 長径・幅径は共に後屈時に増加した。